

1. ついで主はモーセに告げて仰せられた。
2. 「イスラエル人に告げて言え。
あなたがたが聖なる会合として召集する主の例祭、すなわちわたしの例祭は次のとおりである。
3. 六日間は仕事をしてもよい。しかし七日目は全き休みの安息、聖なる会合の日である。
あなたがたは、いっさいの仕事をしてはならない。
この日はあなたがたがどこに住んでいても主の安息日である。

説教

レビ記23章は「主の例祭」についての教えです。神さまはイスラエルのためにお祭りを設けてご自身の民を事あるごとに集めるようお命じになります。

1. ついで主はモーセに告げて仰せられた。
2. 「イスラエル人に告げて言え。
あなたがたが聖なる会合として召集する主の例祭、すなわちわたしの例祭は次のとおりである。

「会合」、^{カーラー}「召集する」と訳されている言葉は「呼ぶ、呼び集めるar'q'」から派生しました。新約聖書の「教会」^{エクレシア}と訳される「avkklhsi」の元々の意味も「呼び出す」です。聖なる神さまは、この罪の世からご自身の民を呼び出してお集めになります。そして、罪を洗いよめ、聖別し、聖なるご自身の民を聖なる者として、再びこの世にお遣わしになるのです。このために用いられたのが、レビ記23章に定められている「主の例祭」です。ここには、毎週の安息日(3)、年に一度ずつ祝われる過越の祭(5~8)、初穂の祭り(10~14)、七週の祭り(15~22)、ラッパを吹く日(24,25)、贖罪の日(27~32)、仮庵の祭り(34~36,39~43)が紹介され、それぞれ記念して祝うよう命じられています。

元来、安息日の定めは十戒の第四戒に定められました。「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。」(出エジプト 20:8) それは一つには、神さまがこの天地を創造してくださったみわざを思い出すためです(出エジプト 20:11)。そしてもう一つには、神さまがイスラエルをエジプトから救いだしてくださった救いのみわざを思い出すためでした(申命記 5:15)。このため安息日には仕事をすることが禁じられました。

3. 六日間は仕事をしてもよい。しかし七日目は全き休みの安息、聖なる会合の日である。
あなたがたは、いっさいの仕事をしてはならない。
この日はあなたがたがどこに住んでいても主の安息日である。

ここで言う一切の仕事とは、具体的には、①野でマナを拾い集める(出エジプト 16:26,29)、②パン焼き、調理(23)、③耕作、刈り入れ(34:21)、④火の使用(35:2,3)、⑤薪集め(民数記 15:32~36)といったことですが、これらは当時のイスラエル人が通常従事していた内容です。今日で言うと、会社勤めや自営業といった生活のための仕事、主婦の家事がそれに当たるでしょう。こうした自分の生活のための労働は、一週間のうちの6日間のみに限定されました。そして、七日目は自分のための労働を一切禁じられます。七日目は「全き休みの安息日：安息の安息」とされて「聖なる会合の日」とされたのです。

安息日の掟を破って労働することは、聖なる安息日を「汚す」と言われます。いけにえや聖所が聖と呼ばれ、正しく扱われない時には神さまのさばきを受けて死刑とされたように、安息日を汚した者は神さまのさばきを受けて死刑に処されました(民数記 15:35)。そして、安息日を汚した国も滅びました(ネヘミヤ 13:17~18)。

それで、安息日には、イスラエルの民は一切の自分の労働をやめて、「聖なる会合」「主の例祭」である礼拝に集いました。そこで神さまにいけにえをささげました。神さまに祈りを捧げました。神さまを讃美しました。神さまのみことばを聞きました。神の家族としての会食を楽しみました。兄弟姉妹の交わりをしました。そして、さらには、神さまの良きわざに励みました。特に、祭司は安息日には一日中神さまの栄光をあらわす働きをしました。

イエスさまも、それと同じように、安息日には会堂に行きました。説教をしました(マルコ 1:21)。悪霊憑きから悪霊を追い出しました(1:25)。弟子の家を訪問しました(1:29)。病いの者を癒しました(マルコ 1:34,ルカ 13:10~17,ヨハネ 5:2~9)。空腹な者の腹を満たし(マルコ 2:23~28)て、神の栄光をあらわされました。

安息日は聖なる日です。

「神はその第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。

それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。」(創世記 2:3)

いけにえにしる、聖所にしる、聖なるものを神さまにささげるのと同様に、イスラエルの民は安息日を聖なる日として神さまにささげなければなりません。「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ」(出エジプト 20:8)とは、安息日を神さまの時間、自分の自由にならない時間として神さまにささげることを意味します。

しかも、いけにえなどとは異なり、安息日の聖別は、自分自身が身を以てその時間を聖なるものとして行動しなければなりません。いけにえの場合は、それを神さまにささげたら聖なるものは奉獻者の手から離れるのですが、安息日の場合には、言うなれば、奉獻者自らが「いけにえ」や「祭司」のようにならなければならないのです。これはまさに生きたささげ物、神さまへの生きた供え物と言うべきものです。自分自身が身を以て神さまのみわざをなし、神さまのものとされたことをあらわすのです。

そして、イスラエルの民が安息日を聖別して生きる時に、聖なる安息日は彼らに霊的ないのちをもたらします。いけにえや聖所が神さまの聖なるものとしてイスラエルの民に霊的ないのちをもたらしたように、聖別された安息日もまたイスラエルの民に霊的ないのちをもたらします。自分の仕事を休み、雇い人を休ませ、聖なる会合に集って、神さまに礼拝をささげ、神のことばを聞き、交わりをし、神さまの良き働きに励んで、神の栄光をあらわしてこの日一日を神さまにささげることで、人々は休息を得ます。「安息の安息」を得ます。「全き安息」を得て、いのちを回復するのです。

そして、さらには、祭司のように、イエスさまのように、人々に神のことばを証しし、人々のためにとりなし祈り、人々の祝福のために仕えて良きわざに励むことで、周囲の人々に聖なるいのちをもたらしていくものとなるのでした。

1. ついで主はモーセに告げて仰せられた。

2. 「イスラエル人に告げて言え。

あなたがたが聖なる会合として召集する主の例祭、すなわちわたしの例祭は次のとおりである。

3. 六日間は仕事をしてもよい。しかし七日目は全き休みの安息、聖なる会合の日である。

あなたがたは、いっさいの仕事をしてはならない。

この日はあなたがたがどこに住んでいても主の安息日である。

イスラエルは、神さまの恵みによって救われ、聖とされました。そして、聖とされた者として、聖なる者としてのあり方が求められました。

「イスラエルの全会衆に告げて言え。

あなたがたの神、主である私が聖であるから、あなたがたも聖なる者とならなければならない。」

それで、聖なる者としての歩みとして、まずは聖所の聖別が教えられて、そこで神さまにささげるべきいけにえ

について何章にもわたって教えられました。それから祭司の任職が教えられます。そして、全イスラエルと祭司がどのように具体的に自分の生活を聖別するかということが教えられて、そうして、23章では、日の聖別が教えられます。時間を、日を神さまのために聖別するのです。

過越の祭り、初穂の祭り、七週の祭り、ラッパを吹く日、贖罪の日、仮庵の祭りと、年に一度ずつの祭りを聖別し、「安息日」の聖別が教えられます。これは他の祭りとは異なって、毎週です。年に一度の祭りとは異なって、年に52もあります。一週間に一度、毎週毎週巡ってきます。神の民としては、毎週巡ってくる安息日を聖別して神さまにささげて、神さまのために奉仕して神の栄光をあらわします。毎週毎週神さまへの献身が試され、訓練され、鍛えられます。そうやって、自分の時間を神さまのためにささげて生きることを学んでいくのです。

そして、神さまは、私たちが神さまのために聖別する安息日を通して、ご自身の栄光をあらわしてください。私たちにみことばを教えてください。祈りを聞いてください。神さまが私たちの造り主にして救い主であられることを静かに思い知らせてください。私たちに安息を、しかも安息の安息を、全き安息を与えて、休ませてください。私たちのいのちをすっかり回復させてくださるのです。そして、神の聖なる民として生きる力に満たしてくださるのです。これまで学んできた、聖なる神の民としての生き方を生きていく知恵と力に満たしてください。罪深いこの世にあって、あらゆる困難に耐えて、神さまのみこころを全うして神の栄光をあらわして生きていかんとする知恵と力に満たしてくださるのです。

ここに集われた、神さまにこよなく愛されている、神さまの恵みによって聖なる者とされたおひとりおひとりが、今日のみことばに教えられた通りに、忠実に安息日を聖別して生きていかれるよう祈ります。そして、神さまからいただく全き安息といのちに満たされて、聖なる神さまのみこころを行い、この罪に死んだ世に神の栄光を力強くあらわして、この地に神の国をもたらしていかれるよう、御名により祈ります。